そして、女神は知る

零斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして、女神は知る

【Nコード】

N7378Z

【作者名】

零斗

【あらすじ】

> 神々の黄昏<ラグナロクを、私は引き起こす。

邪神ロキが起こしたように。

私は全てを、破滅させる。

私に心は要らない。

私は一人だ。

過去の罪等知らない、私には関係ない

なのに、何故私はこんな場所に閉じ込められた？
私は何なのだ？

人なのか、巨人なのか、いきものなのか、違うのか？
分からない、分からない。

ラグナロクを引き起こすため、一人の少女は旅に出た。

m i d n i g h t b l u eより移転しました

序章（前書き）

ここは狭い。

光がない。

寒くて、暗くて、何もなくて、うごけなくて。

私は何なのだ？

人間なのか、動物なのか、それとも、何でもないのでか？

憎い、憎い、全てが、憎い。

何故、私はここにいます。何故、閉じ込められている？

当代の主神も全知全能ではないのか？

何故、罪のない私をここに閉じ込めた？

憎い、憎い、憎いぞ。

奴等に滅びを。心から敬遠し、忌み嫌う、破滅の時を。

> 神々の黄昏くラグナロクを私が執行しよう。

全てを、破滅させてやる。

人間なのか、動物なのか、何なのか分からない、私が。

ラグナロクを、引き起こす。

序章

風の噂が流れた。

どうやら、>アースガルド<のヴァルハラにある塔に幽閉されていた重罪人の女神が脱走したらしい。

しかも、ヴァルハラのおいくつかの塔や建物を全壊させての逃亡、罪が重くなるのは確定だろう。

木陰は思ったよりも、狭かったらしい。

秋から冬に変わるために落葉する木々のことを考えていなかった。そろそろ、移動しなくてはならないようだ。

低俗な人間どもに女神を捕られるわけにはいかない。あの女神は>神界<ヴァルハラを滅ぼす鍵になる。

黒髪が風に揺れる。血を垂らしたようなピジョンブラッドが映すのは一つ下の道。

姿が見えないが、微かな血の臭いと共に怒号が聞こえる。

傷物にされる前に入らなければ。

やはり、抱くのならば、傷のない純白の方が良いに決まっている。

女神はきつと、己を閉じ込めた>天界<に怨みを抱いているのは目に見えているのだから。

我が>ヘルヘイム<に手を貸すことを渋るとは考えにくい。渋られたら、力づくで服従させるだけなのだから。

長年の怨みを晴らすために父王が白羽の矢を立てたのだ。女神を手に入れた暁には王位をやると言われたが、兄たちが黙ってないだろう。何せ、嫉妬により自分の実の弟を殺害しようとする、そんな奴等だ。女神が、>神界<以外も破壊してくれないかと思っていたりする。そうすれば、ヴァルハラもミッドガルもニヴルヘイムも全て

が滅んでくれるだろうから。

>世界樹くと有名なユグトラシルにより九の世界に分けられた世界の底辺に当たるニヴルヘイムには、光が入らなかった。ニヴルヘイムは太陽を知らない。

死の国であるヘルヘイムには更に光が通らない。

無いものは欲しいのである。

欲しくて、欲しくて、たまらない。

まだ、顔も知らない女神に恋をするかのように男はニヤリとわらった。

その笑みは敗北を知らない者が見せる勝利に酔った様な笑みであった。

祈る女神（前書き）

女神は唄う。

逃げられない、主神の手の中で。

まるで、美しい籠に閉じ込められた小鳥の様に。

しかし、美しい女神は気付かない。

逃げる世界が主神の物なのだから。

祈る女神

追っ手が掛かった。

しかし、神の持つような神々しさや威厳や力を感じない。だが、傲慢さは肌を突き破るのでは、というくらい鋭く伝わってくる。

では、>神界くに所属していないであろう、生き物が何故私を狙うのであろうか。

理解できない。

後ろからは数人の人間が追いかけてくる。

神である彼女には追いつけないであろうが今まで動けなかった身だ。身体が鈍っていた。

差が少し開けば転ぶ、開けば転ぶの繰り返しだった。それによりなかなか巻くことが出来ず距離は縮まるばかりだった。運命の女神は何をしてきているのだ。やはり、主神の命を受け、邪魔でもしているであろうか。

女神はその美しい顔を歪ませていた。

とにかく不愉快であった。何年経ったか分からないがあのような暗い場所に押し込められ、出てきてみれば変な奴等に追われる。

一番、気に食わないのは何度も何度も転び、言うことを聞かない自分の身体だ。

丸腰で、尚且つ、身体がちゃんと動かない。これでは狙ってください、捕まえてください、と宣伝しているようなものだ。やはり>神界くを破壊するのは悪かったのかもしれない。もう少し、頭を使うべきだったと後悔するが所詮、後の祭り、後悔など意味を持たないのである。

どこか、身を隠す所、もしくは身を守る武器、それを手に入れなければまた、あの暗い場所に閉じ込められる。

女神は上手く動かない腕で身体を擦る。鳥肌が立っている。

畏怖している、自分は女神なのに。こんな欲にまみれたような生き

銀の女神と死の国の王子

息が近い。きつともう差などないだろう。

「…捕獲…し…」

息も絶え絶えながらに追手は数人の仲間と連携を取っている。女神を捕らえるために。

身体は異常なほど暑かったのに、今は逆だ。寒い。背中から氷が滑り落ちる感覚と冷水を寒いなかに頭から掛けられるような感覚がせめぎあう。

剣が欲しい。こいつらを追い払う力が欲しい。

無いものをねだって意味などないに決まっているのに。>救世主くも来ない。自分はまた、逆戻りだ。

走っていた足は諦めと共に止まった。そのまま、座り込んでしまう。足は動くのを止めてしまった。息は上がっていない。否、上がってはいた。しかし、追い詰められた女神にとって、上がっていいようがないからうが関係はない。

止まった獲物を取り囲んだ人間たちは不可解な表情を表す。女神の諦め等人間には伝わらないのである。人間たちは狼狽していた。

「どうした？早くお連れしろ。………冥界の奴等や獣人どもに奪われては面倒だ」

リーダーなのだろうか。もうどうでもいい。あんな暗い部屋でも毎日食事は出された。食べさせてもらっていた。何を食べていたかは分からないけど。

ただ、この青い空を見れなくなるだけだ。見えなくなる、ただ、それだけなのだから。

本当だったら春を小鳥と歌って花を愛でて、夏を木と過ごし、秋の実りを喜び、冬を眠ろう。そう考えていた。だが、所詮夢は夢ではない。

「怯えていらっしやる。やはり、何千年もの月日を一人でお過ごし

になられ、心が動かなくなってしまうわれたか。………かわいそう
な方だ。主神も惨いこと。………我が、女神様。我らと共にいらし
てください。そうすれば絶対に安全です」

「…あん……ぜ……ん？」

女神は顔をゆっくりと上げていた。リーダーを見上げる子供の様に。

「………生憎だが、その女神、俺がもらい受けよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7378z/>

そして、女神は知る

2012年1月9日04時52分発行